

《原 著》

## 骨シンチグラフィによる乳癌の胸骨単発骨転移の経時的検討

三好 秀直\*      大塚 信昭\*      曾根 照喜\*      永井 清久\*  
玉田 勉\*      三村 浩朗\*      柳元 真一\*      友光 達志\*  
福永 仁夫\*

\* 川崎医科大学放射線科(核医学)

要旨 乳癌は骨転移の頻度が高いために、術前の病期決定あるいは術後の骨転移検索の目的で骨シンチグラフィが施行されている。特に、胸骨骨転移は集積が多彩で個体差があり、良性骨疾患との鑑別が困難な部位の一つである。今回、胸骨に単発の骨転移をきたした6例と良性骨疾患3例(骨折2例と関節炎1例)について経時的な骨シンチグラフィの検討を行った。

胸骨単発骨転移が出現した骨シンチグラフィでは、集積増加が5例、欠損像が1例であった。経過観察中に hot spot の増大、欠損像の増大などの所見がみられた。一方、良性骨疾患では経過観察中に異常集積は消失または不変であった。また CT 上は4例が溶骨性変化、1例が骨硬化性変化を示し、hot lesion でも溶骨性変化が大部分であった。

今回の結果、胸骨単発骨転移例のように早期診断が困難な症例に対しては、他の画像診断を用い、総合的に骨転移の診断を行うとともに経時的な骨シンチグラフィを行うことが重要であると思われる。

(核医学 36: 419-424, 1999)